



## 院内部門紹介

### 救命救急センターのご紹介

### 救命救急センター長 大西 基喜



救命救急センター(以下、センターとします)は救急部・総合診療部・集中治療部からなります。「救命救急センターが開設！」などという、その建物がセンターそのもので、センター員はその中で働く人を考えがちですが、実はセンターは組織名でして、その構成はこの3部門からなります。一般の方がイメージするセンターは、実際はその中の「救急部」ということになります。

救急部は文字通り救急医療を行っており、緊急の症状を持った患者さんに対処しています。典型的には救急車やドクターヘリで搬送された方々ですが、それは年間で4,000人にもものぼります。ところが直接救急部を受診される方はざっとその3倍いて、その全員に365日昼夜なく対応しています。受診後入院する人も多いのですが、救急棟の3階にHCU(高度治療室)という、主として救急入院を受け入れる病棟があり、現在4ベッドで稼働しています。また、平成23年度からは青森県のドクターヘリの基地病院のひとつとして、ヘリコプター運航も行っています。更に災害拠点病院としてDMAT(災害派遣医療チーム)を含む災害対応も積極的に行っています。

救急診療室には昼は専属の救急部医師が勤務していますが、夜は全病院的に当直医が勤務します。そして、患者さんの病気が心筋梗塞であったら循環器科の医師が呼ばれ対応する、という風に、各専門科医師が応召に備えて毎日待機をしています。従って救急診療室は全科医師が救急患者さんを巡り交錯する場でもあります。

センターの外来診療のもう一つの柱に総合診療部があります。ここは通常の外来診療のスタイルで、概ね次に述べるような内科的な問題をもった患者さんに対応しています。現在のところ紹介状の有無は問わず、

どなたでも受診可能です。かかりつけ医など他の診療機関に受診されている方は、これまでの経過がわかるように、紹介状を持って受診していただいた方がスムーズな診療につながると思います。

総合診療部がどのような機能を持っているかと言いますと、1)救急部と有機的に連携する:救急受診された患者さんは入院しない場合、翌日も受診された方がよい場合で診療科がはっきりしない場合のフォローを行います。これは結構多いです。2)初診の振り分け機能:紹介状がなく、専門科が明瞭でない場合、最初に診察し、最も適切な専門各科に紹介します。逆に専門各科への紹介状があっても、内容によっては最初に総合診療部が診察する場合があります。3)感染症診療:結核やインフルエンザなど、さまざまな全身的な感染症を診察します。4)病状が複雑な患者さんを診察する:いろいろな科にまたがる場合や心理的な問題から身体症状が出ているなど、病状が入り組んでいる場合にも調整的に診療することがあります。5)予防医学:禁煙外来やメタボ外来など、病気の予防についても対応しています。6)地域の支援:さらには県内の地域医療を担う公的病院への支援活動も行っております。

病院内の大手術後の患者さんや、病院内で重症化した患者さんを診るICU(集中治療室)もセンターの一部門です。これも県病が高度医療を実現するにあたり、まさに不可欠な部門です。センターはこれら3部門を一体的に運用し、急性期から予防医学まで県民の多様なニーズに対応するとともに、常に専門各科との緊密な連携のもと、県内唯一の県立総合病院として適切な高度医療を県民の目線に立って継ぎ目なく提供できるよう日夜努力しております。

## 世界で一番体にやさしい狭心症の治療

循環器科部長 吉町 文暢



太い針で刺されるのと、細い針で刺されるのはどちらが痛くないでしょうか？どちらが体にやさしいと思いますか？

では、体に太い管を入れるのと、細い管を入れるのではどちらが体にやさしいと思いますか？

心臓の血管（冠動脈）の中が狭くなることで起こる病気を狭心症と言います。血流が悪くなることで、胸が苦しくなります。

狭心症の治療の一つに、“カテーテル治療”があります。これは、手首や太ももの付け根の動脈から医療用の管（＝カテーテル）を入れ、冠動脈の狭いところに網状の金属の筒（＝ステント）を入れて病変部位を拡げる治療です。

（図1）

では、太いカテーテルと細いカテーテルでは、どちらが体にやさしいと思いますか？

私たちは患者さんに“やさしい治療”を提供したいと考え続け“世界で一番細いカテーテル”を開発いたしました。そして、これを日々の治療に使用しています。

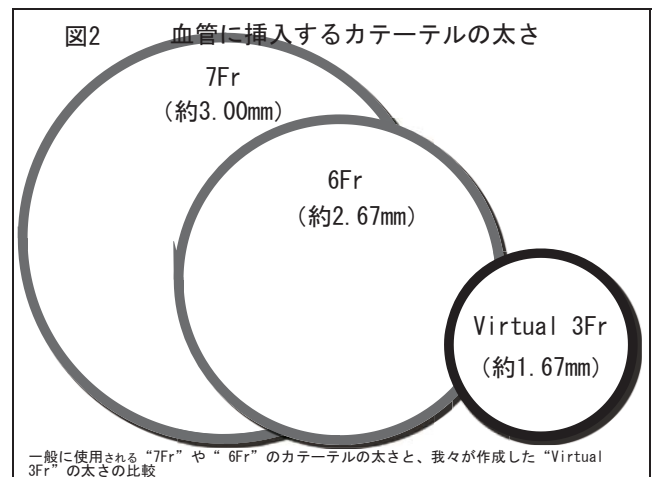
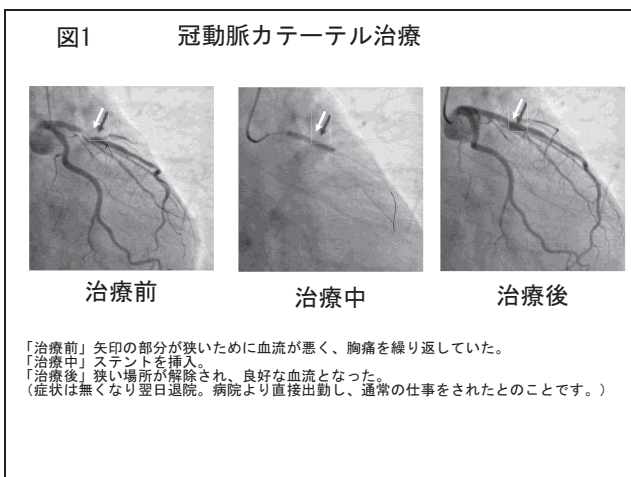
これが、「世界で一番体にやさしい狭心症の治療」です。（図2）

県病・循環器科で治療を受けた方には意識されることはない通常医療のように思われがちですが、実は世界最先端の目新しい治療なのです。

このカテーテルを使った治療技術を取得したいという医師からの要望に答えるため、国内外の学会での講演や、世界中の病院に出向いて現地の患者さんへの治療を行っています。当院にも多くの医師が訪問され、見学や実技指導を受けられています。

もちろん、「体にやさしい」だけではありません。過去に外科手術が必要な複雑病変にまでカテーテル治療が可能となりました。当科では、様々な技術を駆使することで、他院でカテーテル治療を断念された病変に対しても良好な成績をあげていると自負しております。

平成24年4月に県民公開講座を企画しております。私たちの「世界で一番体にやさしい狭心症の治療」を皆様にご紹介すると共に、アメリカの医療機器開発分野で活躍している先生に心臓治療のトピックスについてお話頂く予定です。皆様のご参加をお待ち申し上げます。





我が国で神経内科専門医制度がスタートしたのは1975年。当時、我が国ではスモン病が猛威を振るっていました。スモン病、ご存知ですか？手足が急に麻痺し眼が見えなくなる恐ろしい病気で、未知のウィルスが原因かと騒がれましたが、胃腸薬キノホルムが原因であることを当時の神経内科医が突き止めました。水俣病が水銀中毒によることを見つけたのも神経内科医です。つまり、神経内科医とは脳神経障害の原因を探し出して内科的治療を行う専門医で、神経内科はそんな専門医の集団なのです。脳外科医が脳腫瘍や脳出血など眼に見える病気を手術で治すのに対し、神経内科医が扱う病気にはMRIやCTで見えないものが沢山あります。そこで、神経内科医は診察で病変部を特定する「神経学的検査」という特殊技術を身に付けています。

神経疾患の症状は三つに大別されます。運動症状と感覚症状、高次脳機能症状です。

運動症状とは自由に動くはずの手足がうまく動かせなくなる状態で、眼や瞳や顔の動き、呂律や飲み込みの障害などがあります。手足のケイレンももちろん運動症状です。

感覚症状では手足のシビレ感が代表的ですが、視力低下や難聴、匂いや味覚の低下、頭痛やめまいも感覚症状の一種と言えます。意識を失うと運動も感覚も失われますね。

高次脳機能障害は異常な物忘れや言葉の異常、それに身の回りの認識障害や行動変化などがあり、認知症などで問題になります。幻覚や妄想をきたす脳障害もあります。



県病神経内科スタッフ（平成23年11月）

以上のとおり、神経内科は頭のとっぺんから足の先まで、体の表面から高等な心の働きまで、全科に広がる神経系を診る科です。ですから欧米では内科とは全く別の「神経科 neurology」という科になっています。CTやMRIでは見えない脳や神経の病気も沢山扱うので、脳波や筋電図、神経伝導検査、誘発脳電位などの電気生理学的手法を駆使するのも神経内科の特徴です。写真は平成23年10月に県病で行われた神経伝導検査講習会の様子で、東日本北日本各地から沢山の専門家が研修のために県病に集まりました。県病の電気生理検査は我が国トップクラスの指導的レベルにあります。


県病神経内科は東日本最大規模の神経内科施設で、来年度に開設30周年を迎えます。私たちのモットーは「治す神経内科」。県民のみなさんの診療から得た新発見を国内外トップクラスの医学雑誌に沢山発信しています。神経系の不調が疑われる場合には、ぜひ主治医に紹介状を作成していただいて、神経内科を受診してください。神経疾患では治療が遅れると重篤な後遺症を残すので、脳卒中かなと思ったらまっすぐに受診するなど、出来るだけ早い治療開始が大変に重要です。脳卒中の撲滅を初め、県民の皆さんの脳神経疾患克服が私たちの願いです。




神経伝導検査講習会で指導する筆者（平成23年10月）




①  わたしは、遠い国から「ばい菌退治」のためにつかわされた姫


②  私はお殿様から「どうも『病院』というところは、何やら悪さをする敵が潜んでいるらしい！みんなの健康を守るため、何とか退治してきてはくれんかの～」と仰せつかりましたの。

③  今は「感染管理認定看護師」として青森県立中央病院に潜入しています。


④  私たちは「菌」に囲まれて生活しています。でも全ての「菌」が、人に悪さをするわけではありません。私たちの健康を守ってくれる「常在菌」という菌もいます。

⑤  私は「悪さをする菌」から患者さんや病院で働く職員を守るために、「必須アイテム」を持って参りました。




⑥  この「必須アイテム」を組み合わせると、私たちは患者さんを「悪玉菌」からお守りします。ですから、こんな格好で、患者さんのところにお伺いすることが多々あります。



⑦  でも、何よりも大切なのは、一人一人が「手洗い」することが「感染予防」の最強アイテムです



♪ 「ハッピーバースデー」や「サザエさん」を歌いながら手洗いすると、15秒から30秒間しっかりアルコールや石けんが手に接触し、「悪玉菌」を手から取り除いてくれます。

⑧  あ、もう一つ！「最強アイテム」をこっそりお教えいたします。



編集後記

「ふれあい」は主に職員および関係機関向けの広報紙として発行されてきましたが、この度、患者さん向けの広報誌としてリニューアルすることとなり、今回がその第1号です。今後、患者さんやご家族の皆さんのニーズに応えられるような紙面作りを目指して行きたいと思っております。より多くの方にご覧いただければ幸いです。(ふれあい編集委員長)